

「そうながや!?! 仁淀川」

第2回

仁淀川シンポジウム報告書

平成25年2月2日  佐川町立桜座



仁淀川清流保全推進協議会



仁淀川清流保全推進協議会

.....

そうながや！？仁淀川

第2回仁淀川シンポジウム次第

.....

<主催団体等>

- 主催：仁淀川清流保全推進協議会・高知県
- 共催：仁淀川流域交流会議・佐川町
- 日時：平成25年2月2日(土) 午後1時～4時40分
- 場所：佐川町立桜座

<テーマ>

「そうながや！？ 仁淀川」

仁淀川について、そんな良さがあったがや！そう言われてみれば、まだまだあなたが知らない魅力があるかも～外からの視点で仁淀川の再評価を行うとどうなるのか～そうながや！をテーマに開催。また、昨年引き続き、仁淀川流域の清流保全に関する様々な活動を公表するためにロビー展も開催。

<プログラム>

1. 開会挨拶

2. ポスターセッション

- ①「四国、高知、そして仁淀川を応援するアサヒビールの活動について」
小山勝久 アサヒビール(株) 高知支社長
- ②「日本一の水質は果たして大丈夫なが？」
石川妙子 仁淀川清流保全推進協議会会長

3. 基調講演1

ジョン ムーア
演 題：「Miraino Tane — Niyodogawa 未来の種 — 仁淀川」

4. 基調講演2

黒笹 慈幾(やすし)
演 題：「神様が高知にくれた宝物・仁淀川の魅力とは？」
— 釣りバカ浜ちゃんが仁淀川に惚れた5つの理由 —

5. トークセッション

ジョンムーア × 黒笹慈幾 × 岩崎ひすい(進行役)

6. 閉会挨拶

第2回仁淀川シンポジウム～そうながや!? 仁淀川～

は じ め に

平成22年3月に第2次仁淀川清流保全計画を策定しました。この計画の目指す方向は、仁淀川のよい水質を維持するとともに、仁淀川で釣りをしたり、遊んだり、生き物がたくさんいたりという、人と自然が織りなす美しい仁淀川にしていきたいと考えています。その計画を推進するために同年6月に仁淀川清流保全推進協議会が設立されました。

協議会の主な活動としまして、平成24年10月20日に、第2回仁淀川一斉清掃を実施し約500名の参加を得ました。協議会では10月24日を、「仁淀川・環境の日」と決めて、その前後の土曜日に仁淀川の清掃を実施することとしており、今後もこの一斉清掃の取り組みが定着し、参加者も増えればと思っております。

もう一つは、仁淀川のことを考えていくためのシンポジウムを開催しました。

今回は非常に魅力的なジョンムーアさんと黒笹慈幾さんを講師に迎えることが出来ました。お2人は、東京という大都会から来られ、外から見た視点での仁淀川の再評価～そうながや仁淀川のテーマにふさわしいお話をいただきました。その中で高知県、そして仁淀川がどんなに素晴らしく価値があり、財産であるということの再認識することが出来ました。

会場の参加者からも、「地域に誇りを持てるようになった。」「目からウロコ、外からの視点での提言いただき良かった」などの評価する声を多くいただきました。

このシンポジウムに参加いただけなかった皆様にも、どういったものであったかをお伝えするために、報告書を作成しました。皆様の今後の活動の何らかの参考になれば幸いです。

これからも協議会では、清流仁淀川を守る活動に取り組んでいきますので、今後とも皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

最後にシンポジウム開催にあたって、佐川町には会場の提供をはじめ、多大な協力をいただきました。また スタッフの皆様、準備にかなりの労力を費やしていただきました。この場をお借りしまして、関係者の皆様にあらめてお礼を申し上げます。

平成25年3月吉日

仁淀川清流保全推進協議会

会長 石川 妙子

◆当日シンポジウム会場風景



◆当日シンポジウム会場風景



ポスターセッション

進行 岩崎 ひすい

発表者 (1) 小山 勝久 アサヒビール(株) 高知支社長

(2) 石川 妙子 仁淀川清流保全推進協議会会長

①「四国、高知、そして仁淀川を応援するアサヒビールの活動について」

小山 勝久 アサヒビール(株) 高知支社長

アサヒビール四国工場の10周年を記念して、おいしいビールを造ってこれたのは、四国のおいしい水とそれを育む森があるからこそと考え、2008年から、四国の環境保全活動を支援するために、期間限定でスーパードライの売り上げ1本につき1円の寄付をするプロジェクト、「四国の水・森に、感謝。」と銘打って実施してきました。


スーパードライの売り上げの一部を期間限定で寄付するプロジェクトは、2009年からは全国47都道府県で実施され、環境保全や文化財を保護する活動に役立ていただいています。高知県では、このプロジェクトを昨年までの5年間、計8回行い、1,766万円を仁淀川の清流保全活動に役立てもらうために、寄付させていただきました。

なぜ、高知は仁淀川にしたのかというと、四国工場の水源は石鎚山系にあります。石鎚山系は仁淀川の源流です。四国のビールを作っている工場の水源の川をということで仁淀川にしたこと。もう1つは、高知市にこんなに近い環境にありながら、これだけの水質を保全できているということの感激もあり、仁淀川を選ばせていただきました。

仁淀川の清掃活動に参加するだけでなく、川を守るために、桜の植樹を行うなど水源地の森を保全する取り組みもしております。

もっと地域に貢献したいと考えていたので、四国八十八か所のお遍路の世界遺産を目指している活動に対して、四国工場で製造しているスタイルフリー1本につき1円を役立ていただこうと「元気な四国へ！プロジェクト！四国遍路を世界遺産へ！」缶を発売し、その寄付金を、遍路文化を保存継承し、世界遺産登録を目指すため、さまざまな取り組みに活用いただいています。





 四国の水・森に、感謝。

四国、高知、そして仁淀川を応援する アサヒビールの活動について

アサヒビール(株)高知支社
小山 勝久



 四国の水・森に、感謝。



主力商品「アサヒスーパードライ」の売上の一部を都道府県ごとに設定した自然や環境、文化財などの保護・保全活動に役立てていただき、アサヒスーパードライ「うまいを明日へ」プロジェクトを2009年春より実施し、多くのお客様からご支持を頂戴しています。

四国では、その一年前の2008年から実施している「四国の水・森に、感謝。」キャンペーンを継続する形で、「アサヒスーパードライ「うまいを明日へ」プロジェクト～「四国の水・森に、感謝。」～を実施しております。

高知県での活動

四国の水・森に、感謝キャンペーンの流れ 高知県

企画内容検討～決定

四国工場→ビール→水→川・山→環境貢献がテーマ

高知県林業振興・環境部
環境共生課との打合せ
～寄付先を検討

四国工場(愛媛県西条市)は石鎚山系の
伏流水を使用

高知県においては石鎚山系を水源に持つ
水質の良い仁淀川の環境保全をテーマにしました。

寄付先決定

「NPO法人仁淀川の緑と清流を再生する会」

販促物などの作成

現在は「仁淀川流域交流会議」と協定

高知県での活動

仁淀川の清掃活動





アサヒビール社員も頑張っています！本日にきれいな清流でした。

比較的ゴミは少なく、きれいな川でしたが最後はゴミに大変なりました。

地元の中学生の方も参加されました！

ヒマラヤ桜の植樹





整備コースの付近は小石が多く、開墾作業に難しかったです。

ヒマラヤ桜の苗木を植樹。

植樹した後は、倒れないように鳥籠を3つ設置。

高知県での活動

仁淀川の清掃活動








 四国の水・森に、感謝。



アサヒビールは四国遍路の世界遺産登録を応援します。

「アサヒスタイルフリー」の売上1本につき1円を「四国遍路を世界遺産へ」の活動に寄付。

本キャンペーンは、四国遍路を世界遺産登録に貢献することを目的として実施されています。アサヒビールは、四国遍路を世界遺産登録に貢献することを目的として実施されています。

アサヒビール株式会社

②「日本一の水質は果たして大丈夫なが？」

石川 妙子 仁淀川清流保全推進協議会会長

仁淀川、日本一の清流と言われて、去年辺りから全国の注目を集めていますが、本当のところはどうでしょうか。

国土交通省の平成 22 年全国一級河川の水質調査の結果で、仁淀川の水質は全国 1 位になりました。BOD（生物的酸素要求量）が 0.5mg/l という値で、川の中に溶け込んでいる有機物が非常に少ないきれいな水で、非常に良い水質です。

生活環境に関する河川基準で、仁淀川は AA 類型（BOD1mg/l 以下）と最高ランクの水質という、お墨付きをもらっています。

平成 23 年の調査の結果では、仁淀川は 14 位になりました。「せっかくの仁淀川ブームで盛り上がっちゃうのになんで」。でも、この年の仁淀川の BOD は 0.6mg/l と、0.1 ポイント下がっただけで、AA ランクの水質です。がんばればすぐに 1 位に返り咲くと思います。

仁淀川の水が美しい理由は、流域内人口が約 10.5 万人と少なく、地質は三波川～秩父帯と言って、非常にたくさんのチャートなどのきれいな種類の岩石があるところを流れているため、水がきれいに見えます。

また、石鎚山が源流で、水質が良く、非常に水量のある支流がたくさんあります。

標高 1982 m の石鎚山が源流で一気に山を下って流れるため、河床勾配（河川の傾き）が非常に急です。四万十川と比較しますと、四万十川は不入山が源流で、大体 1200 m 付近から流れていて、川の長さは 196km です。仁淀川は 124km、四万十川は仁淀川より低いところから流れて、仁淀川より長い距離を辿って海に辿り着き、仁淀川は四万十川よりずっと高いところから流れ出して、四万十川よりも短い距離で海に辿り着く、非常に急な流れということです。

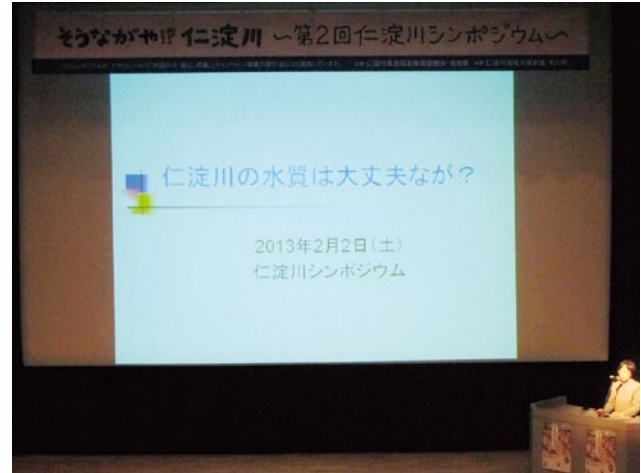
また、流域の平均降水量が約 2800mm と非常に多く、全国平均の 1.7 倍もあります。

こうした要素が絡まって、上流から下流まで良好な水質を保って「奇跡の清流」と言われています。

さて、県外の方は仁淀川を見て、その水の美しさに驚きますが、ずっと昔から仁淀川を見ている人達は、今の仁淀川を見てどのような印象を持たれるのでしょうか。

水質は確かに流域の産業廃水の規制、家庭排水の浄化が功を奏して以前より良くなっていますが、川の豊かさというのは、年々衰えてきているような気がしませんか。

指標になるのが鮎の漁獲量ですが、水質は良くなっているにもかかわらず、昭和 53 年頃と比べると平成 17 年は 5 分の 1 程度に漁獲量が減っています。



森林の荒廃も問題となっています。中山間地の人口減少や木材価格の低迷などにより、上流の人工林を間伐などの手入れをする人が少なくなっており、そのため、森の中は暗くなって下草が生えなくなり、表土の流失が進み、川の濁りの原因になります。

また、川の渇水が続くと藻類が生えて水際が緑色の帯になってきます。もっと水が減ってここが干上がると、今度は白い帯になってきます。下流だけではなく、かなり上流にも同じような傾向が見られます。

川の中の写真です。流れの緩いところは、石の上に泥が積もってその上にまた藻類が生えて、石と石との隙間が無くなっています。また、一見非常に透明な水が流れていますが、川底を足でぐるぐるとかき回すと、細かい泥が舞い上がり、石と石の間が泥で埋まっているのです。

水生昆虫は石の間や石の下の砂地などの微少な空間に生息していますが、石の間が目詰まりすると小さな生き物が暮らす空間が非常に少なくなってきました。

仁淀川は礫河原と言って、きれいな石の河原が広がっているイメージがありますが、ツルヨシが侵入してきました。特に支流にツルヨシが非常に繁茂するようになりました。

土砂の流入や護岸工事が原因として考えられますが、瀬や淵の消失が進行しています。淵が浅くなり、瀬は瀬らしくなくなってきた、瀬の区間が少なくなっています。河床の低下も問題となっています。

昨年度は仁淀ブルーがNHKで放映され、仁淀川を誇りに思う気持ちが膨らんできたと思いますが、仁淀ブルーは「限定的仁淀ブルー」であることを忘れないで下さい。

本当の仁淀ブルーが見られるのは、安居溪谷とか面河溪谷などの源流部の支流に限られます。仁淀川下流の支流は、事業排水、農業廃水、家庭排水などが多く流れ込んでいます。河床勾配が緩いので、なかなか浄化されないという特性もあります。また、流域の下水道の普及が遅れています。本流は水量が豊かなこともあり、河口までBODは1mg/l以下で、非常に水質が良好ですが、波介川、宇治川、日下川、奥田川などの支流ではBODが2とか3になっています。

また、洪水の後は笹濁りが長引くようになってきました。仁淀川本流にはダムがあり、洪水でダムの水が濁るとダム下流の濁りは取れにくくなります。幸いダムの下流には水質の良い水量も豊かな支流が多いので、ダム下流の濁りはかなり緩和されていますが、笹濁りの状態が多くなっています。

仁淀川の水質は最高ランクですが、山を手入れする人や、棚田を守る人がいなくなったりして、流域の山や里の営みが上手く回らなくなると川が衰えて、土がどんどん川へ入ってきて川が荒れます。

人の心も流域でつながってほしい、下流の人は上流のことを思って下さい。上流の人が山の手入れをして、この豊かな水量が守られているということを思って下さい。

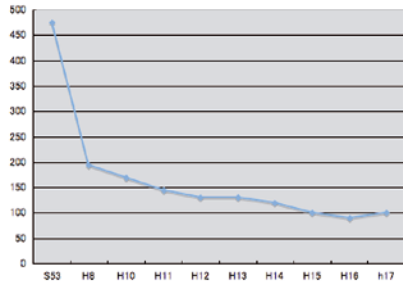
上流の人は下流を思って下さい。台風になると仁淀川の河口は、上流から流れてきたものすごいゴミで一杯です。下流の方に迷惑がかからないように、普段から気を付けていただきたいと思います。

そして、子どもと一緒に川に行って、仁淀川のことを考えられる人を育てたいと思っています。仁淀川の豊かさに五感で接した子どもは、仁淀川のことを決して忘れません。

生き物がいて、人で賑わう仁淀川こそ、本当の清流であると思います。

次世代の子ども達に、豊かな仁淀川を引き継ぎましょう。

仁淀川アユ漁獲量の減少



「中国四国農政局高知農政事務所 高知県農林水産統計年報」より

森林の荒廃



間伐前

暗い林床は下草が生えず
表土の流失が進む



間伐後



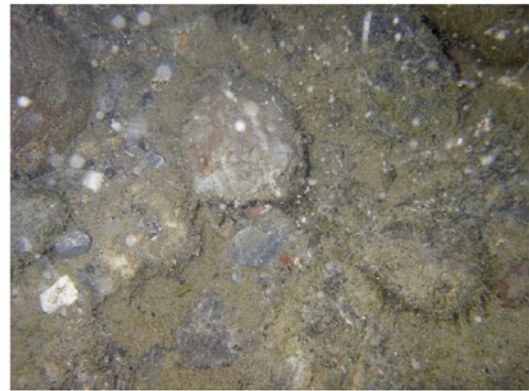
手入れされた森林

「第2次仁淀川清流保全計画」より

冬季の渇水で水際に藻類が繁茂 (2009.6.8 仁淀川)



隙間がない



ツルヨシ等の植物が繁茂 2012年5月 日下川

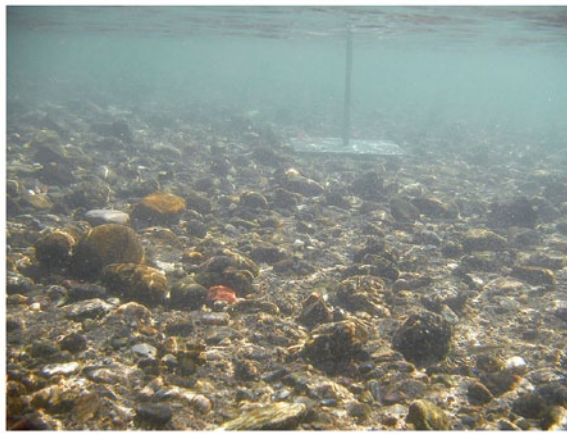


泥が舞い上がる





降雨2週間後の波川 水中 2009.10.23



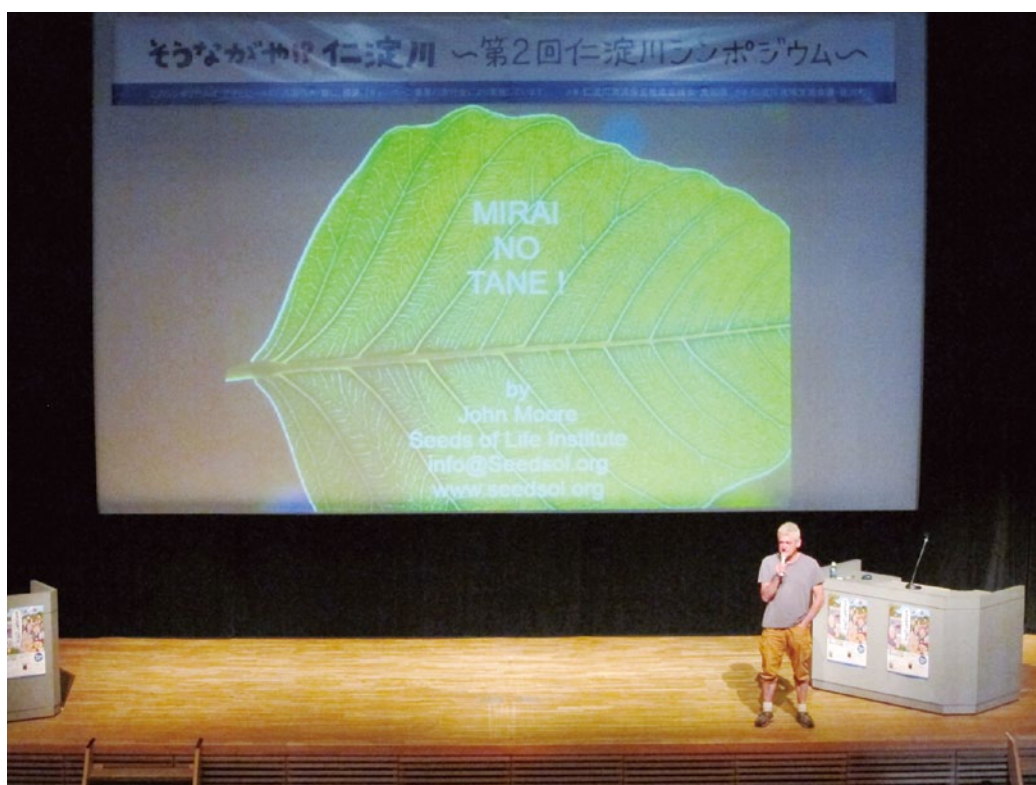
「Miraino Tane — Niyodogawa 未来の種 — 仁淀川」

講師：ジョンムーア

(講師略歴)

1951年 アイルランド生まれ

アイルランド出身で、電通への入社をきっかけに来日。その後パタゴニア日本支社長に就任し、現在は、一般社団法人 SEEDS OF LIFE 代表で在来種、オーガニックスペシャリストである。世界中の農業を視察し、その土地にある種と土を活かす農業を大事にする取り組みを進めている。仁淀川上流域の仁淀川町椿山地区の種の保存活動などに取り組んでいる。



こんにちは、ありがとうございます。がんばってください、私の変な日本語、何を話すかいつも分からない、色々出てくると思います。

1951年アイルランドに生まれました。イギリスの隣の国です。イギリスとは別の国、別の言葉、緑ばかり、小さい山、本当の山はあんまりないです。でも大自然があり素晴らしい場所です。

若い時に私の足、すごい事故がありました。私は学校へ行ってない、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に住んでいました。

おじいちゃんは毎週末山登りをする人、おばあちゃんは自分の畑で、在来種の野菜を作って食

べていました。食べ物は自分の庭からとるもの、買う物じゃない。それが当たり前だった。買うのは変な考え方。だって誰が作ったか分からない、変な水、変な薬、変なやり方で作っているから。

私は60歳、今までに世界中の山を登りました。色々な国に住みました、色々な街で働きました。27年前くらい、ニューヨークに住んでました。その時電通にヘッドハンティングされました。日本は素敵な場所だけど、住みたいとか全然考えてなかった。でも電通が来て、東京で一緒に仕事をしましょうと言われて、それなら行きます。でも30年近く住むとは、考えなかった。

10年前くらいから東京だけじゃなく、でかい街の時代は終わりです。でかい街の人生は辛い。もうでかい街には、本物の人生、本物の食べ物、本物の水、本物の光、本物は何にも無い。今の東京は、自分の夢を実現できない、フラストレーションばかり。

でかい街に住む人間は、隣の人達に挨拶もできない。何にも出来ない。自分の人生の中で情報だけ消費して、物も作りません、食べ物も作らない。お米なんか絶対出来ない。野菜も出来ない。自分の人生が出来ない。

だから10年前に、ずっと東京に住むのは意味がないので、日本中を探しました。自分のために1番美しい場所に住みたい、絶対山の方。1番元気な土、1番きれいな水がある、これからの場所を探しました。北海道から沖縄まで県庁、市役所、会社と一緒に色々な仕事をやりました。3年前高知に来まして、高知の山を見ました。「やっぱり高知だ、高知に越します。」その6ヶ月後に引っ越しました。そして1年半前にこの椿山を見つけました。



この景色私は大好きです、この山霧、これはテレビでは見られない。

これは私の家、まき風呂で外にある、水道や電気は無い。電気はいらんいです。なぜ電気が無いのか、これが私の景色なんです。テレビはいらんい、その山を毎日見ればすごい嬉しい、楽しい、本物の人生、本物を生きる毎日。

誰が電気欲しいの、電気会社は電気欲しい。でも私達電気はいらんいよ。炭、油、蠟燭で十分。炭はなくなる、油もなくなる、いいんじゃない。暗くて見えないけど、

話はできます。友達と一緒に朝まで、どぶろくを飲む。それが本当の人生、本当の時間。

テレビを見るのは、別の人々の人生を見るだけ、アクションも何もしない、本当の人生、何も知らない。でかい街の人達は、もう人間じゃない、変な宇宙人になっています。

この椿山の方は滝が多いです。どこでも滝があります。きれいな美しい場所、これは秘密の場所、絶対教えない。この美しさは説明できない。見ないと分からない。



だから私達は、東京と大阪どこからでも人を持ってきます。「本物を見てください」「本物に触ってください」「本当の食べ物を食べてください」「在来種の野菜を食べてください」。

この杉の木は 800 年、椿山の裏に 800 年だよ、この木。本当の先生、800 年そこに住みました。色々見ました。すごい、何故その場所。結構言うのは「live like a leaf!」、葉っぱの生活をやりましょう。私達は絶対葉っぱの生活をしたら全然違う。山は何万年単位で考えます。山は生き物、山は動きます。すごいゆっくり動く。葉っぱもそう。葉っぱは今日だけの光飲みます。今日だけの水飲みます。今日だけのエネルギーをとります、明日は明日。



人間だけが、もっと売上が欲しい、もっともっと銀行に預金が欲しい。もっともっと土地が欲しい。人間だけが、この惑星の問題だよ。

人間が来る前から葉っぱはあって、この惑星にハッピーな人生を作ります。植物は人間がいらない。だから私達はもう少し葉っぱみたいな生活であった方がいいと思う。

これは为什么呢、植物の根っこです。根っこの毛がありますね。その毛の周りには微生物が住んでいます。この微生物がいないと植物は生きていけない。

微生物は土を作ります、だから元気になる、美味しくなる。微生物は 1 つの畑の中でもあっちの土、こっちの土で、微生物は全然違う。これは大切な話です。

微生物は食べ物を作ります。食べ物は人間を作ります。人間は村を作ります。地元の文化を作ります。だから高知県の人間はユニーク、面白い、ユニークすぎ。素晴らしい、大好き。あまり



隣の人と一緒に仲良くできないけど、自分だけは素晴らしい人生、素晴らしい道を歩いていきます。

遠いところからの食べ物を食べると、自分の腸の中の微生物と違うものになります。だからバランスが上手く出来ない。この人はかわいそう。この微生物はこれから彼を病気になります。

私達は人生をきれいにしすぎました。すごくきれいすぎる。頭きれいすぎ、心きれいすぎ、魂きれいすぎ、家もきれいすぎ、毎日お風呂

は入ります、毎日お掃除しますとか。それは微生物を全部殺します。だから病気になる。

仁淀川は日本で1番きれい。きれいかな。その言葉はちょっと変、ちょっと嘘、ちょっと違う。美しいときれいは違います。大自然も汚いです、でも美しいです。

仁淀川は世界中で1番きれいな、日本で1番きれいな川。

よく東京で講演会をしますが、いつも仁淀ブルーの話します。

自信を持ってください。今あるものは素晴らしいものです、新しいものはいません。今あるものを守るようにしましょう。十分素晴らしいものがあります。

なぜ私は高知県に引っ越したかという、本当の土がある、日本人の1番美味しい、1番強いきれいな土、けれど関東や関西の土は、もう疲れて、野菜ができるまで、本当に土に戻るまで50年かかります。50年葉ばかり使いました。もう微生物がいない。



私のはりまや橋のカフェ、本物の食べ物。皆、本物を食べたい。6月に東京に同じカフェがオープンします、同じものを出します。池川の高知の宣伝になります。

高知県の農業、本当の在来種の種の農業をやりたい、本当の人生をやりたい、これはオーガニックカフェ「SEEDS」はりまや、よろしくお願ひします。美味しいよ。

種は面白いよ、困難がないと本当の種、出てこない。ぜひ守りましょう。

種は何なの、色んな人間の文化、これからの未来。種は神様の贈り物。

例えば大豆、大豆は大体なくなりました、地元大豆がなくなれば大豆の種だけじゃなくて、その文化がなくなり、祭りがなくなります、その言葉がなくなります、その踊りや歌がなくなり、

HEALTHY ?



次の世代はその美味しい食べ物を絶対食べられない。

そのために私は社団法人SEEDS OF LIFEを作りました。

例えば今の大豆は95%はF1種になりました。F1種はアメリカなどの海外から輸入します。日本の物じゃない。地元の本物の食べ物じゃないです。1%しか本当の食べ物ない。それは大問題ね。

F1は悪いという話じゃないです。F1の種、在来種の種がないのはF1の種は作りません。だから在来種の種がなくなると、F1は大問題です。私達の子供達、次の世代。ぜひSEEDS OF LIFE、ぜひ考えてください。

もし会員になりたい方は、よろしくお願ひします。

椿山の目の前の山は、30年前までは焼畑やりました。その焼畑の大切なやり方。その後は何か最初の種は蕎麦、次は小豆、次は。ずっと30年のサイクルで種を守りました。だから池川町、仁淀川町、すごいまだ在来種の種があります、あちこちに。

もし在来種の野菜つくるなら、ぜひ作って下さい、SEEDSで買います、東京のラディッシュボーヤへ売ります。在来種の農業の人生ができます、商売にも出来ます。



これから私達SEEDS OF LIFEは、ボランティア始まります。10人から50人まで

東京と大阪から連れてきます、まずセブンデイズホテルに一泊します、次の日に山に行きます。宝来荘へ行きますとか、椿山へ行きますとか。両方ある。最初のステップで直接山へ行くことは絶対出来ません。それは100%の東京の人は出来ません。



2012年7月、高知県に「SEEDS OF LIFE」誕生。

Mission:
SOLは地域の食文化のために、その土地の種を存続させ、生命は地域にあります。私たちの意識の食文化はその土地の生活、真の牛舎、伝統文化、関心人々を支えます。私たちの子供の未来は、食物の種にかかっています。食物の種は気候であり、気候はあり、環境であり、気候であり、野菜の種です。

SOLは日本の食の健康と連関する種を育むため、オーガニック・フーズ・オーガニック・フーズを推進しました。SOLはこの世界規模の危機への意識を一般に広げるため、教育プログラム、イベントやコミュニケーションを企画します。

私たちは真のSeeds of Life、生命の種が現代にも回復するために日本を育てることに努めます。賢人・権威から支援を求めます。

太陽のよけに与えよう、葉っぱのように生きよう！

Profile:
ジョン・ムーア
John Moore

社会起業家、コミュニティ・エンタプライゼン、高知県農業局、オーガニック・フーズ・オーガニック・フーズ、ルバタ・フーズ（日本食料品、食品メーカー）、アグリー・エデュケーション・センター、有機農業、環境教育、環境教育、オーガニック・フーズ・オーガニック・フーズを推進する、その中で、世界中の学生が日本食料品に習熟し、学習はSOLのOP（OP）を推進する。[受賞歴] カンタベリー賞、Baldrige、グッド・イノベーション賞、FDD賞、Nikkei Global Enterprise 2008年

Kids are seeds

SOL会員になって 未来の種を見つけてませんか。

会はみんな 種をもらえろ。
在米種の種をもらえます。SOL主催の交流会へ参加できます。SOL主催イベントの参加をもらえます。ニュースターをもらえます。このプログラムを推進してもらえます。その時、SOLはより多くの人々を助けます。

種を探せる。
SOLのウェブサイトの中に、これからの生き方や、食の種（種）があるかもしれません。SOL主催の交流会（イベント）に参加して、未来への種をぜひ探してください。

種を拾える。
目を凝らせば、SOLの活動の中に、新しい事業の種を拾えるかもしれません。SOLの理念を持った企業、人材との出会いの中で、自分らしい種を探してください。

二重の意味で
SEEDS OF LIFEは、日本の食のDNAを守るため、在米種のDNA（DNA）を探しています。食物のDNAを拾った種から食物の種を育て、食物の種を育て、食の種を育てることができると、食の種を育てています。人類の命は、全ての生命のために、SOLの会社として、ぜひ積極的に支援をお願いします。

SEEDS OF LIFE
Kids are seeds
Smiles are seeds
Gifts are seeds
Mirai no tane
Live like a leaf!

ずっと仁淀川流域に住んでいる人達は、「これは私達の町です」その意識、その考え方も古い、もう終わり。若い人達に来て欲しい、20代の若い家族が欲しい。その人たちが引っ越しする、最初から人生は出来ないのだから色々なサポートが欲しい。

最初のサポートは、お金はいらなと思う。私の考えでは土。自分の畑をやりたいか、農業をまじめにやりたい、どこに行けば畑を買える場所があるか。誰も売りにたくない、うちも出たくない。

東京でも高知でも、皆は「不景気だから何も出来ない」と、いやちょっと待って。

経済は日本人の生活を作りませんよ。経済は経済、人間は経済を作りません。

これからの経済は何なの。お金はもう古いです、お金は豪華な嘘の生活を作ります。

椿山で皆は来年の種を作ります、1年中毎日自分の食べ物を作ります。本当のお金は種です、本当の生活のお金は食べ物や水。

山は海を作ります。山は絶対川を作ります。海、山、川、日本人は1番良い物を持ってます、素晴らしい宝。だから絶対人間大自然の中でこういう生活ができます。

田んぼの中で野菜作りたい、なぜ田んぼの中で野菜を作りたいか。これは面白い。

田んぼの微生物、畑の微生物は全然違います。田んぼの微生物は水が大好きな微生物、畑の微生物は空気が大好きな微生物。だから田んぼの中で野菜を作りたい。

色々虫も来るし、色々問題が来ます。簡単な話ではないけど、「でもやりたい」。

もう1つのお話は、光。仁淀川の光は素晴らしい。太陽の光と、月の光、両方が大切、植物と食べ物を作ると場所を作るために。月の光、いつ葉を作ります、いつ花を作ります、いつ実を作ります、月のサイクルを自分でよく見て下さい。1つの植物を毎日見て下さい、いつ葉が出てくる、満月、

BASIL MOON LIGHT CYCLE



新月、半月。見て下さい、面白い。毎日毎日、月の光は全然違う、違うもの、だから違う花、違う根っこ、違う葉を作る。

仁淀川には素晴らしいものはまだあります。まだその技術はあります。まだその生活はできる。今大きい街の人達はその生活にすごい興味があります。東京で四季はあまり関係ない、夜は、太陽がなくなっても皆分からない生活をしています。「本当のお金」は何、「本当の生活」

が皆欲しい。

仁淀川に来ると、素晴らしくてあたたかい人達がいる、美味しい物を食べて、自分の地元になる、絶対。

ぜひ、SEEDS 種、考えて下さい。未来の種、私達の仕事は自分のためにももちろん、自分の家族のために、自分の地元のためにももちろん大切。でも次の世代のために、それが本当に私達の仕事。

99歳のおじいさん、新しい柿の木、一生懸命植えます。彼は絶対その柿を食べません。その柿、この土、この木、この村、次の世代のために農業をやります。それが本当の農家さん。それが本当の未来のため。私も死ぬまで仁淀川に住みます。椿山は素晴らしい場所、でも今は3人になりました。おじいちゃんとおばちゃん2人、祭りや、正月の時とかは、人達が帰る。でもずっと住んでいる人達は少ない。は椿山だけじゃなくて、日本中そんな話があります。本当に、素晴らしい宝があります。どうかこの宝をお守りしましょう。この宝でこれからの次の50年生活できます。それをぜひ今日考えましょう。

これが最後の大切な話。これから東京は無視する方がいいと思う。色々な意味で、海外を考えた方がいいと思う。アジアの国々も本物、きれいなもの、安全な食べ物欲しい、その技術が欲しい。大切、だから自然が面白いと思う。色々学生さん集まれば、色々会社が集まります。海外から、日本中から集まると、色々できます。

新商品が開発できます。素晴らしいものが出来る。今あるものを、もう1回パッケージし、作りなおします。あるものの物語を作る、システムを作ります。

これから仁淀川の宝、ベースはきれいな水、1番は水、すごい。なぜ仁淀川のビー



ルが作れない、なんで。仁淀川は水、ビールを出さない。なぜ？

色々な宝があります、色々チャンスもあります。お金はかからない、人を集める、やる、絶対色々なものが出来るよ。

これからSEEDS OF LIFE、SEEDSは、いの町のすごい辛いとうがらし、小さいかわいい瓶で、東京で売ります。からしが大好きな人達絶対います。

おじいちゃんおばあちゃんが作ります。いの町の値段と東京の値段とは全然違う。

高知に来ると、本物を見られる、農家さんが見える、おじいちゃんおばあちゃん、一緒に遊びをする。

ぜひ考えて下さい。もし何かやりたい、ジョンに話して下さい、もしできるのであれば一緒にやります。もし私が出来ないなら、私は色々な人や、会社も知っているから、話を聞いてくれます。これから本当に新しい仁淀を作りましょう。新しい生活、新しい意識。

SEEDS OF LIFEは色々やります。種を作るだけじゃなくて、音楽もやりますアートもやりますとか、色々イベントもやります。

仁淀川椿山の音楽も作りました。今日は、ぜひ紹介したい。この音楽は大自然の雰囲気を作りたい、今の話を音楽で説明したい。今年と来年そのミュージックと一緒にツアーやります。種の交換、音楽のイベントとか講演会とか、色々なパフォーミング。

なぜか、この話は大問題です。皆一緒にやらない、考えないのは新しい芽を絶対作りません。だからぜひ皆集めてください、自分も友達と自分の家に集めて、考えて、そういうエネルギーが欲しい。もう1回考えます、別のものを作りましょう。



「SEEDS OF LIFE」

<http://www.seedsol.org/>

「神様が高知にくれた宝物・仁淀川の魅力とは？」 —釣りバカ浜ちゃんが仁淀川に惚れた5つの理由—

講師：黒笹 慈幾

(講師略歴)

1950年 東京生まれ 中央大学法学部卒業

1974年 小学館入社 ビッグコミックオリジナル編集配属、西岸良平「三丁目の夕日」、北見けんいち「釣りバカ日誌」、弘兼憲史「人間交差点」などヒット作を生み出す。1981年「ビーパール」創刊スタッフに参画。1995年「ラピタ」創刊編集長。1998年より2003年7月までビーパール編集長。2006年3月、母親向けの家庭学習誌「edu(エデュー)」創刊編集長。2009年より小学館児童・学習編集局チーフプロデューサー、小学館クリエイティブ取締役。2011年11月、定年退職を機に高知へ移り住み、南国生活技術研究所を設立。担当者として関わった書籍は『復興応援写真集 山古志村ふたたび』(新潟)、『仁淀川漁師秘伝 弥太さん自慢ばなし』(高知)『猿猴川に死す』(高知)『定年釣り師』(岩手)ほか、多数。

自他ともに認める「釣りバカ」編集者。人気コミック「釣りバカ日誌」の初代担当者、主人公の「浜崎伝助・通称ハマちゃん」のモデルとしても有名。



まずは自己紹介から

ジョンさんのとろけるような不思議な日本語と音楽の後なので、非常にやりにくい。

ジョンさんがA面ならば、僕はB面でやらせていただこうかなと思っております。

私は東京から高知の方へ勝手に押しかけて参りました。ジョンさんもよそ者ですけども、私もよそ者です。でもよそ者じゃなきゃ分かんないことって結構ありますので、そういう観点からお話をさせていただこうと思っています。

まずなぜ、黒ちゃんが浜ちゃんなのかは高知新聞の連載に書きましたが、人気コミック「釣りバカ日誌」の初代担当者だったことからいただきました。

ほんとは高知でひっそりと暮らすつもりが、浜ちゃんだということがバレて、ひっそりどころか、こういう席で話すという大変な事態になりました。

連載のおかげで色々な方達から、呼んでいただいています。「あの黒笹さんね」どこに行ってもすぐスイッチを入れていただきまして、新宿の歌舞伎町でパンツ1枚で名刺を配っている感じなので、大変に恥ずかしいのですが、ありがたい連載をいただいています

大学卒業してすぐ小学館に就職して、そのまま37年間小学館にいたので、履歴を書くと1974年小学館入社、2011年小学館退社の2行で終わってしまいます。非常に寂しい履歴です。何をやってたのかということを紹介しないと大変に寂しいことなので、雑誌をやりました。「三丁目の夕日」、「人間交差点」、「釣りバカ日誌」の初代担当者で、BEPALの編集にも創刊時から長年関わりました。1番新しいのは「edu（エデュ）」という家庭教育誌の創刊編集長を最後はやりました。

雑誌の編集をしながら、単行本も出しました。全部で52冊、高知県関連の本の結構あります。ということは最初から高知には大変興味があったということだと思います。

仁淀川に惚れた理由その1 仁淀川でステキな人に出会った

「黒ちゃんが仁淀川に惚れた5つの理由」というタイトルを掲げましたので、第1番目をどうしたらいいかなと深く考えました。

越知町の今はもう亡くなられて大変に寂しいんですけども、浜ちゃんが仁淀川に惚れたきっかけは、この人に出会ったからと言っても間違いなかなと思います。

最初に会った当時は、編集長をしていた「ラピタ」という大人の少年誌という、少し物好きな感じのオヤジの人達を相手にした趣味の雑誌で、「大人の少年の夏休み」という大特集をやり、仁淀川の撮影をするために取材に行きました。

仁淀川はやっぱり鰻だよねという話になり、漁協に電話して、応対いただいたのが宮崎弥太郎さんだったんです。



電話で「仁淀川の天然鰻の撮影をしたい、できれば鰻料理も食べたい」と言ったんですが、宮

崎さん電話の向こうで分からないことを言ってるんです。よく聞いてみると「我々は3匹から5匹くらい鰻を用意していただけないか」という話をしたのが、宮崎さんはどうも気にいらないうで。「そればあでえいが」と言うんです。つまり、たったの3匹とか5匹でえいのか、もっとたくさんいらないうのかという話だったらしいんです。

とにかく川漁に関しては自信を持っている方で、その後楽しい取材をさせていただきました。

佐川町出身の森下雨村は宮崎弥太郎さんの次くらいに仁淀川に来るきっかけになった方です。東京では非常に有名な雑誌「新青年」という日本の推理小説のパイオニアを自認する本の編集長で、江戸川乱歩とか横溝正史を世の中に送りだした、大変な編集長だったんですが、昭和15年佐川町に帰って、そのまま東京には行ってない。

元編集者ということで、非常に尊敬をしまして、「猿候川に死す」というエッセイを書きました。仁淀川を中心に交流していた当時の人達の珠玉の話がいっぱい出てきます。大変に素晴らしいエッセイで、入手してなめるように読んでました。



仁淀川惚れた理由その2 仁淀川にステキな仕事があった

仁淀川には素敵な仕事がありました。宮崎弥太郎さんは、本になりました。本の見返しに伊野の和紙をしおりにして「仁淀川漁師秘伝」という形で世に出しました。大変に評判になり、全国的にもかなり売れました。これで「黒笹はまた高知に行くのか、しょうがないな」というようになりました。

次に森下雨村の「猿候川に死す」です。非常に貴重な本で古本屋でもなかなか手に入らないため、再編集して、森下雨村の評伝を後ろにつけて復刻版を売り出しました。

「猿候川に死す」は、雨村が亡くなってから出ました。生前本人は恥ずかしくて言い出せなかったみたいです。すごい高知の人らしいなという感じがするんです。死後に書斎から見つかった原稿を雨村にお世話になった人達が、本にしちやおうよということで、本になったのが幻のエッセイ「猿候川に死す」です。

仁淀川に惚れた理由その3 仁淀川にステキな魚がいた

最初に素敵な魚がいたことを仁淀その1にしようかなと思ったんですが、あまりに個人的なことなので、3番目に潜ませました。

自慢ばい写真ですが、僕が釣った鮎です。釣ってすぐfacebookに上げたら、東京の仲間が「すごい面白くない」という非難のメールが殺到して、高知では「自慢の仕方が難しい」ですね。





(「一個人」より引用)

作家の夢枕獏さんという大変に親しい釣り仲間がいて、一緒に高知の川で随分釣りをしております。「一個人」という雑誌で、獏さんは連載コラムを持ってて。そのコラムで、「高知県は、海よし、川よし、ほどよき文明もあって、人生の後半戦を生きるには実によい所である。」大変にありがたくて、一流の小説家がここまで高知を評価してくれているのは、ある意味大切なことと思ったので、コピーして配りまくってます。

仁淀川に惚れた理由その4 仁淀川にステキな景色があった

その4 ステキな景色、よそ者から見れば宝石のような景色が、仁淀川流域にはたくさんありまして、この景色は重要なアトラクションの要素になったかなと思っています。

平成24年8月のANA機内誌「翼の王国」が仁淀川特集をやりました。最初は12ページの予定でしたが、取材陣があまりにも仁淀川が素晴らしいため、お陰様で18ページも取り上げられました。とても良かったなと思うのは、タイトルが「仁淀川のたからもの」。これはまさに今日のテーマにぴったりのタイトルだなと思いました。

これは仁淀川町の池内さんの茶畑です。本物はずっとすごいです。マチュピチュだなと思いました。こんな景色はない。高知県にはこういうところが、いっぱいあるんだろうと思います。こういう景色が普通にあるとカンボジアかなと、石組み



も素晴らしいし、「これは、とんでもないな」と仰天しました。



仁淀川に惚れた理由その5 仁淀川にはステキな未来がある

ここからが今日の本題。仁淀川の未来をどうするのかは、皆さん共通の関心事であります。ステキな未来があると書こうか、ステキな未来があるかもしれない、と書こうか、ちょっと迷いました。まだ特定できないからです。あるというふうに誰もが確信を持って言えるようにしていかなければいけないかなと。

私なりに考えた仁淀川流域の未来形の話を見せていただいて、今回のメインテーマとさせていただけたらな、と思います。

自分達が持っている財産というのは、東京、大阪とかそういう都会の人達にとって見果てぬ夢なんだということを、先ず信じないと。

よそ者の視点になって考えると、仁淀川流域の財産というのは、都会の人が手に入れたくても、どうやっても手に入れない貴重なもので、彼らにとって見果てぬ夢なんだということをまず信じる必要がある。

そのためには、1度外から自分達の地域を見直す機会が必要。外からというのは、よそ者の意見を聞いてみるのも含めて、1度外に出てみるということもあるかもしれません。どちらにしても、見直すために、そういう意識を少し持たないと。

特に若い人は、1度高知の外に出て、自分の生まれた場所を客観的に評価する機会がほしいなと思います。流域の若い人達は何らかの形で、外に出ようとする時には応援してあげて、また戻っておいでよというふうな形で追い出す必要があるかなと思います。

仁淀川流域の価値、財産というのを、何だと思うことですが、1つこれかなと、この流域にこそ、言葉は難しいですが、田舎にこそ都会の人を魅了する洗練された手法が必要だと。洗練というのは、価値観を構築するためのひとつの技術かなと思います。

じゃあ洗練とは何かというと、まず都会の真似をしない。それから都会にこびる必要もない。この両方がともするとやりがちになるんです、自分達の持っているものというのは、都会の人達は手に入れようとしても手に入らなかったということ。真似する必要は全くありません。こびる必要もない。そこを非常に重要で前に進む必要があると思います。

都会の人達にとって、洗練された田舎ってどういうイメージなんだろう、地元の人達にとって自分達が誇れる洗練は、何なんだろう。

僕は外から来ましたので、自信を持って言えますが、「また来たい魅力的ななにか。」

もう少し深くお話しをすると、ローカリズムというのは地方色ということですが、なぜ都会からわざわざ高知に来るのか、仁淀川流域に来るのかというと、仁淀川流域の地方の匂い、ローカリズムに触れたくて来るわけです。

東京には東京のものがあるわけですから、高知にしかないものを味わいに来るわけで、洗練されているものであれば都会の人は反応すると思います。仁淀川らしい地方色、ローカリズムを訴えるように取り組めば、都会の人達にとってこの流域は大変に魅力的なものに映ると思います。

例えば景観、先ほど自然、美しい景色に引っ張られて私が来たと言いましたけどそういうもの。知的刺激、例えば森下雨村の話をしました、宮崎弥太郎さんという優秀な川漁師さんの知識の奥深さに触発されて本を作りましたけど、そういうものです。

それから高知県の人達が共通に持っているホスピタリティ、これも東京にはないと思います。こういうものを存分に組み合わせて、しかもそれを洗練された形で即興することによって東京の人達なり、県外の人達なりが1度高知に来た時に、「また来たいな」と思って帰ると思います。

それがおこれば、流域の地元の人達は、「俺達の持っているものは、やっぱり都会の人達を呼べるようなステキなものを持っているんだ」という自覚につながると思います。

例えば土佐の日曜市、観光の人達にとってみると目玉だと思いますが、なぜ都会の人はこれを魅力的だと思うのか。あそこに行く和生活の匂いがします。都会の人が欲しくても手に入れないものは地方の生活の匂いが、まだまだ色濃く残っています。



これはおしゃれだなと思ったものです。池川の茶畑プリン、商品のパッケージも大変おしゃれで、味も素朴でとっても洗練されていて、よくこういう物がこの流域の奥のほうで生まれたなど。シンプルだけど贅沢な匂いがする。手作りの洗練、デザインの洗練、それからコピーワードの洗練、洗練の三重奏と言いたい、この商品の中に様々な洗練が眠っていたので、とても反応しました。

よそ者の視点で見た場合、この流域にどんな含み資産があるのか。まだ具体的に動いたわけではないけれども、こういう方向に何らかの形で動く方がいらっしゃるなら、私も関わってみたいなと思っています。

仁淀川流域観光の含み資産の一例

天空に伸びる茶畑の景観 → 観光モノレール

安心安全な仁淀川の農水産物直売 → 仁淀川マルシェ

流域にある既存の食堂の再構築 → コミュニティレストランの機能を付加

仁淀川そのもののポテンシャル → 「川遊び特区」

茶畑の景観は素晴らしい。ビューポイントを作るというやり方もあるし、ベンチを1つ置くだけでもいいと思います。できれば農産物の収穫用のモノレールに子ども達を乗せられるようにしたら、すごいことが起きるなと思います。

農産物の直売を、洗練されたローカリズムの視点で再構築して、仁淀川マルシェみたいな統一感のある取り組みができるかなと思っています。

また来たいと思わせるには、食べ物の記憶は、とても重要な要素。コミュニティー機能を付加した、コミュニティーレストランはどうか。地元の人達、農家の人達が気軽に寄って、泥のついた靴でも上がれるような構造になったレストランやカフェの体裁をとりながら、都会の人達が入りたくなるような店を作ることが出来ると思っています。

漁協の麻岡組合長に、夏休みに家族向けの安全できれいな水遊び場を仕切って「川遊び特区」をやりませんかと提案してます。漁協とか色んな関係者の方達の理解が必要だと思いますが、子どもも大人も混じって、何をやってもいい、釣りもいいし網もいい、鉄砲をやってもいい、そういう解放区ができれば、仁淀川の知名度は一気に上がると思います。

仁淀川の未来を確実に描くために喫緊の課題を考えました。

喫緊の課題1) 思い出のテイクアウト商品づくり。また来たいと思わせるためには1番有効、帰ってから思い出させるもの、食べ物でも記念品でも、何でもいい。

洗練されたローカリズムを織り込みながら、何らかの形のお土産にして、作れるといいと思います。意外と高知にはそういうものが少ない。

思い出のテイクアウト商品を作るうえでのヒント、実際手長えびせんべいを作ってみました。大変おいしかったです。手作りです。

山椒の畑がたくさんあるのを発見しました。これを赤岡の辺でじゃこがいっぱい取れるから、京都の様なじゃこ山椒が作れるかなと思いました。じゃこ山椒の場合重要なのは山椒の実です。良い山椒の実が手に入るかが結構大事、やってみたら面白いと思いました。

仁淀川を代表するキャラクターがないので、考えて見ればいいかなと。キャラクターもいっぱいあります。かわうそも仁淀川の象徴にしてもおかしくないと思います。穴場はボウズハゼ。高知に来て初めて見ました。地元の人達はあんなもんと言うかもしれませんが、ボウズハゼって名前がおもしろいのでキャラクターに使えと思っています。

観光でいうと、例えば沈下橋ですが、もともと地元の人達が通るために作っただけで、あの上でのんびり過ごしたり、川を眺めたりという機能はない。でもエプロン付けてベンチをおくだけで、どんなにか楽しい観光ポイントになると思います。沈下橋も、もっと売り出して行って、もっと戦略的に情報を出していけばいいかなと思っています。

喫緊の課題2) 仁淀川観光の拠点になる町とその役割分担の明確化。

外から見てよく分かったんですが、「仁淀川を見に行こう。さあ、どこへ行く」って言った時に、拠点がないと分からない。いの町なのか、仁淀川町、土佐市なのか、拡散してどこに行っているか分からない。流域の市町村が連携して自分達の役割分担、例えば仁淀ブルーは池川がやります、茶畑はうちがやりますとか、観光物産・お土産は土佐市がやりますとか、外から見てわかりやすい役割分担を、意識して連携をするべきと思っています。

河口の土佐市ですが、仁淀川のブランドを存分に使っているとは思えないので、もったいない。土佐市が仁淀川全体の流域の経済とか、農産物も含めて、大変重要な役割をしていますし、仁淀川の恵みを享受していると思うんです。もっと主体的に土佐市は仁淀川のブランドに関わってくればいいと、おせっかいかもしれませんが。

大好きな佐川町の大正軒の鰻です。東京、北海道の人を連れて行きました。

東京の鰻に食べ馴れていると、ここの鰻はすごい衝撃です。箸を入れると跳ね返ってくる。プリンとこう戻ってくる鰻は初めて。東京の鰻は箸を入れるとすっと入っちゃいます。

料理法が全然違う。これも洗練されたローカリズムの意識でやれば、ものすごく大きな資源になる。佐川は司牡丹と鰻で売ると決めれば出来ることがいっぱいある。

喫緊の課題3) 仁淀川流域の未来を託す人材の発掘・育成。僕なんか60過ぎのオヤジが、ジョンさんも60歳ですし、いくら言っても、この人達ってあと10年とか20年くらいしかないです。そうすると30代とか20代のもっと先のある人達に、この仁淀川のプロジェクトに関わってもらわないとちょっと厳しいと思います。ここをどういうふうにするかということは重要だと思います。

最後になりますけど、1番大事なことで、自分達が持っている財産ということに自覚することにつながるの、やはり誇りを持って流域に暮らすことから全てが始まると思います。これができれば、どんなことでもがんばれるかなと思ってます。

「仁淀川 未来の設計図」とよそ者の視点で見た喫緊の課題も含めた設計図と言えるかなと思ったので、参考までに。

仁淀川、未来の設計図

- 財産目録を作る
- 今、足元にある価値に気づく
- 都会のまねをしない、都会に媚びない
- 訪れる人にもういちど来たいと思わせる仕掛けを作る
- 洗練されたローカリズムで都会人をもてなす
- 思い出のテイクアウト商品の開発
- 観光の拠点になる市町村を決める
- 未来を託す人材育成に取り組む
- 誇りを持って流域に生きる

なんらかのお役に立てればと思って高知に来ております。ジョンさんがアジテーターなら、僕は人柱になるつもりで来ております。南国生活技術研究所という組織も持っており、お役に立てるかと思しますので、お声をかけていただけたらと思います。



本当の豊かさってなんだろう？

「いま、ここにある幸せ」を見つけるお手伝い。

「南国生活技術研究所」は誇りを持って高知に生きる人たちを応援し、どんどん増やすお手伝いをするために生まれてきた会社です。

<http://www.nangokuseikatsu.com/>

トークセッション

「いまなぜ 仁淀川なのか これからは高知の出番!?!」

進行役 岩崎 ひすい

パネリスト ジョン ムーア 黒笹 慈幾

(司会)

トークセッションの方を始めさせていただきます。ジョンムーアさんと黒笹慈幾さん、そして司会の岩崎でお送りさせていただきます。

色々な川好きな方がいまして、愛媛や土佐清水に単身赴任なのにわざわざ来てくれたり、幡多には東京から奥さんについて3年前に来て、こっちで自分は何をしようか考えているという方もいらっしゃいました。

(ジョン)

1つは、東京や大阪から田舎に住みたいと引っ越す人、仁淀川を全然知らない人達。

もう1つは、もっと面白いと思う、池川木材の社長は東京に何10年働いていた人。外から仁淀川が見える。彼は池川に帰りました。なぜか、この辺住みたい、この大自然に自由に遊びたいとか、この人生と東京の人生、両方あるけど帰りました。その2つ。結構違う人、両方大切と思う。

池川木材の会長は大自然が大好き、すごい素晴らしい人。社長はもっと若い。彼はこれから東京の目と仁淀川の目、両方ありますから、これは新しい未来図を作ります。これはチャンスだと思います。

(黒笹)

小原さんのことだよね。僕はお父さんとカラオケをやりました。ものすごく上手くてすごかった。もう乗り移ったような歌で、その印象がものすごく強くて、また歌いたいなと思っています。

(司会)

不思議かもしれないですけど、川のことを話していると2人とも知り合いがたくさんいる、私もお昼にいただいた椿山弁当を作ったコンビニの押岡のおばちゃんには、すごくお世話になってます。仁淀川カーニバルのイベントで司会をさせていただいた時に、押岡のおばちゃんが出店して、知り合いになった。そこで、スガジャズダンスの子ども達の踊りを見てファンになってくれて、どこでもイベントに来てくれるようになった。仁淀川の人とつながって、ジョンさんと一緒に仁淀ブルー商品を作っ



てる。

(ジョン)

川は面白いでしょう。川は人を集めるもの、世界中の人を集めます。川は人を集め、人のやることにも集まります。だから仁淀川は素晴らしい場所。素晴らしい未来が絶対にあります。



(司会)

黒笹さんも、川や高知の話をしていると、顔が少年のように見え、どんどん柔らかくなって、本当に高知のことを好きでいてくれるんだなど、川がベースの活動が多いと思いますが、人とつながっていくことは多いですか。

(黒笹)

高知はそういう傾向がある、コミュニティーがちゃんとまだ機能しているし、人と人とのつながりが強い。

本山町に瓜生野というところがあり、そこにNPOの仕事で行って、おばあちゃん達と一緒に100歳体操をしたら、途中で苦しくなって脂汗タラタラでしたが、おばあちゃん達は平気でそのままやるんです。

そのおばあちゃん達を見て感じたのは、とにかく自分達で何とかするという気持ちがとても強い。誰かちょっと体の具合が悪いと、その人を周りが支えるのが、もう自然に動いていて、肩を貸して集会所まで来るとか、毎日「具合はどうか」と聞いたりとか、自然にやってる。

都会人の見果てぬ夢という話しをしましたが、コミュニティーそのものが、都会では崩壊しています。それが心地よいという時代もあったと思うけど、高知に来てコミュニティーの濃い感じ、これがとても魅力的で、東京生まれの東京育ちで、そういうところに育ってないから、そういう濃いところに行ってみたくてしょうがなかった。

川は川がつかないかどうか、川を支えてると言ったらいいのか、コミュニティーの力がとても強いという気がします。

(ジョン)

本当に水は大切。きれいな水あんまりない、毎年毎年、きれいな水はなくなります。人間が本当に使うお水、安全に使うお水はなくなります。仁淀川の水は宝です。

(司会)

そうですね。川が汚れてきていることに関して、ご意見がある方がいらっしゃったんですけど。お話ししていただいていた方がいいですか。

(客席)

愛媛から来ました。東京に何年間かいて帰ってきました。

川でカヌーやったり泳いだりすると、地域によって川は汚くなったり、きれいになったりしています。当たり前なことなのに、ごみを捨てないでという看板がこんなところにあるのか、山奥に行けば行くほど出てきます。僕みたいな子育ての世代は仕事が忙しくて、川の清掃なんかできてない。忙しい世代だとは思いますが、もう少し考えないといけないと思う。自然を大切にするというのは、遊ぶことから始まったり、魚を釣ったりすることも大事とは思いますが、山があって川があって海があるわけで、つながっていくんだよというのを、理解したうえで生活をするのが大事だと思う。

(ジョン)

山を掃除します、川を掃除します、ビーチを掃除しますは、大反対です。掃除をするその同じ人はごみ出します。その人の意識は変わりません、同じ問題になる。同じ人が掃除します、同じ人がごみ出します、捨てちゃう。だから意識が変わらないといけない。

私はあちこちで農業をやり、農業をするのに色々な薬を使います。でも大体田舎の農業している人も「この川も若い時は魚がたくさんいたが、最近は魚がいない」と文句を言いますが、そういう人も「もちろん薬も肥料も使いますよ」。その薬や肥料が川に流れると、川から魚がいなくなります。

人の意識が変わらないと未来は絶対変わりません。だから川を掃除するなら、人間の意識を掃除する方がいい。人間を洗濯する方がいい、その方が正しいよ、日本を洗濯しましょう。日本人の意識を洗濯しましょう。川がきれいになれば、山がきれいになれば、未来は全然違う未来になると思う。

(司会)

意識って大事ですよ。次世代に残せるものは心だと思うんです。

あなたが大事に思っている心があるからこそその悩み苦しみだと思います。

ヒントが見つかっていけばいいんですけど、ごみのことであったり、苦しんでらっしゃいますよね。子ども達に教えたくても忙しいからとか、どうしても「～だから」ということが先に立ってしまい、どうしても1歩踏み出せない。でもここからは、もう1歩踏み出すことを一緒に考えてみたいと思います。

川ガキや特区の話がありましたけど、黒笹さんは、子ども達の意識を育てる、何か面白そうな企画とかありますか。

(黒笹)

仁淀川漁協の組合長さんの頭は柔らかくて、また一生懸命、随分色々な事をやっています。僕の子どもも去年参加させましたが、子ども達に魚を触らせたり、つかみ取りしたりするツアーをやってくれました。それで子ども達が仁淀川で自発的に遊ぶようになるには、まだツーステップくらい進まないと難しいと思った。

仁淀川漁協の取り組みは立派だと思うので、次は川遊び特区みたいな形にして、子ども達の中に川で遊ぶ楽しさを刷り込んでおかないと手遅れになる。

今のお父さんの世代は川の体験がない。1世代、ワンゼネレーションの空白が出来ている。そうすると川の体験をしたおじいちゃんなら知っている。だから孫とおじいちゃんをつなぐ取り組みをやりながら、次世代を託す子ども達に川で遊んで欲しい。

仁淀川って1番最初に感動したのは夏休みのあの町の橋の下です。こんなに人が川原に家族で出て遊んでいる川は、日本中になんかいない。それだけで仁淀川はなんて地域の人達と一緒に流れている川なんだろうと。昔に比べると川に背を向ける人達がドンドン増えていくと色々な方が言っていますが、まだま

だ仁淀川は立派な川で、人と川がちゃんと一体となって流れていると思う、今のうちだったら仁淀川はなんとかかなるかなと思うんです。

ごみの問題は、誇りを持ってその流域に暮らすかどうか。この川と一緒に自分は暮らすという気持ちがあれば、ごみを捨てることは普通はしないと思う、何らかの形で川に背を向けているライフスタイルがあると思います。

よそから仮にごみを持ってきて誰かが捨てておくとすれば、地域が「そんなことをしたらいかん」とガードする、という形にしないといけない。そうは言っても基本的に限界集落になっているわけで、人口がどんどん減っている中で、なかなか簡単には言えないと思うけど、でもこのまま諦めていいのか、諦めたらだめですよ。そういうところに若い人達、僕ぐらいなじじいでもいいと思います、あと10年はがんばれますから、例えばそういう人達が、なんらかの形で社会的な役割を持ちながら流域に来てもらえるような仕組みが作れたら、まだ大丈夫だと思います。

だめなところもいっぱいあると思いますが、少なくとも新しい時代に向けて、新しい価値観を、まず仁淀川の流域で見本を示して、それが高知全域に広がって、さらに県境を越えて他の地域に広がり、そして東京が変わって、日本全体が変わっていくみたいな。それぐらいの大きな志を持って、日々の自分の暮らしを見詰め直して前に進んでいく、そういう気持ちがちょっと欲しいなど。誇りを持って流域に暮らすというのは、そういうことも含めて必要かなと思ってます。

(司会)

流域に暮らす人だけではなくて、流域に心を寄せる人達も含めて、流域を愛する人達につながっていくと思います。私は高知市のスガジャズダンススタジオに所属していますが、普段はダンスのインストラクターをしているので、川に行って遊ぶ時間はほとんどない。けれども仁淀川をキーワードにしてつながって、子ども達と一緒に踊りを通して人の意識に働きかける活動をずっとさせてもらってます。

要は自分達の世代がこれからの地球を守っていくと。まず自分達の地域なんだというところを育てて、そこから表現するだけではなく、具体的に1歩踏み出していくということなんです。

ちょうど特区の話が出たから、来年の仁淀川シンポジウムは子ども向けとか、子どもをテーマにしてみたい企画があると聞いたので、うちも夏休みは仁淀川にみんなで遊びに行ってみようという企画が持ち上がりました。

時間がかかるとは思いますが、人と人とのつながりで、自分が主体的に関わるようになって、その関わる人が増えていくことから始まると思う。

(ジョン)

うちの8歳の娘は田舎に住んでる子どもより、彼女がずっと田舎の子どものらしい。今の子ども達はゲームボーイとかをやります。誰も大自然で一緒に遊びをしない。

高知市の人達と山の方の人達は、すごいギャップがある。高知市の人達は仁淀川を全然知らない、分からない、あんまり来ない、全然来ない。

最初のステップは、仁淀川シンポジウムを来年高知市でやったほうが良いと思います。真ん中でやったほうが良い。すると、高知市の人達は田舎にもっと来ます。

田舎の遊びしましょう、飲みましょう、川で一緒に遊びをしましょう、色んな遊びを紹介します。本当に最初のステップ。誰か東京や大阪から高知市へ来る、自然に仁淀川の話になって「仁淀川は行ったほうが良い、すごい場所だよ」と言ってくれる。

高知市の人達は仁淀川を紹介できません。遊びをしないから分からない。それは大きい仕事だと思う。来年の仁淀川シンポジウムは街中で祭りのような感じでやったほうが良い。

なぜって高知市の人達は祭りが大好き。祭りですりあえず飲もうよという感じ「いいよ、飲みましょう」。アサヒビールのスポンサー祭りとか、街中で、ビアガーデン祭りで仁淀川を紹介しましょうとか、絶対動きますよ。

(司会)

そうですね、義務になると続かないと思うので。さっき黒笹さんが出してくれた企画がすごく面白くて、じゃこ山椒と地元の食堂を整備して、高知のランチパスポートが出ています、ランチパスポートに掲載されたお店は通常700円、800円するランチが、ランパス買えば500円で食べれる、仁淀川流域のお店がランパスに登録されてたら、行くと思うんです。そこで川遊び体験もできる特権も付いていると面白い。

お話聞いただけでも、自分だったらどうするかとか、どんどん前に行けるんですけど。会場の皆さんどうでしたか。しーんみたいな感じでシャイですね。

(黒笹)

さっき楽屋での話ですけど、高知の人は、いろんな人と一緒に協働して何かをやるのがとても苦手な人達です。だから高知でたくさんの人を集めて、目的は同じだからがんばろうというのは、なかなか難しいなというのはよく分かっています。

でもそれは良さでもある、僕はそれも含めて好きで来たわけです。仁淀川流域の話をしていますが、別に仁淀川流域だけの話じゃない。どうしてかと言うと、仁淀川流域だけが栄えて高知県の他の流域が滅びたら、やはりだめですよ。ありえない。県としては全然意味がない、仁淀川流域も栄えて、他の流域も栄えたらいいと思う。ただ、誰が最初に先陣を切ってやるかの問題だと思う。

小さなサクセスがあれば、「それならば俺も出来る」と、ついてくる人が出てくると思う。でも全くサクセスも何もなければ、ありえないわけです。

仁淀川は1番最初に小さなサクセスを作れる資格があると思う。そのポテンシャルがあると思ってる。

四万十川とか安田川はどうでもいいとか、物部川はかなり問題がありますけど、どうでもいいとは思っていない。物部川だってちゃんと栄えて欲しいし、流域で暮らす人達が皆幸せになることが、絶対に高知県がこれから県民所得最下位から多少なりとも上に上がっていくために必要なことだと思います、

その中でまず1歩先に仁淀川流域が踏み出そうという、そういうお話です。

そういう気持ちでどうですか、我々がやろうとしていることは、もっとパブリックなテーマなんです。自分達のためだけにやっていることではなくて、高知県がこの後こういう世界の中で、日本の中で、どういうふうに自分達の誇りを持って、未来に向かって進んでいけるのか、というテーマにつながっていると思います。それをまず仁淀川からということなんです。



(司会)

拍手が出ました。感動した時や心が動いた時はどンドンやりましょう。

川というと水なんですけど、ジョンさんの種と微生物の話ですけど、面白い。自分の中の微生物とその畑、土地の微生物が1つだったら本当の循環というもの生まれるというお話です、そういう可能性が椿山ですでに始まっているんですよ。

(ジョン)

椿山は素晴らしい場所。本物は何なの、本物は自分の土、よく分かるもの。動物、植物、人間、虫、なんでも自分の土は何なの、自分の生活、自分の村、自分の畑、自分の体、自分の意識、それは自分の土、よく分かります。

もう人間だけじゃない、人間だけ私達は大体地球はせますぎ、全部生き物、これからの生き物たち。それが椿山の、池川のこういう村、こういう地元の人達の素晴らしい、地元の土はよく分かる、自分の生活はよく分かる。

それは大きいまちと、世界中の最近50年の文化はもうないでしょう、いなくなりました、自分の土。よく分かる自分の土。意識もなくなりました。だからそういう、戻った方がいいと思う、未来を作るには。

種は何なの、笑うのも種です、思いやりも種、子どもも種。色々な種があります。川も種、山も種、種は大事なもの。

(司会)

その話を聞いて、自分は何者なのかというところ、すごく感じられたんですけど、本当に流域に暮らしていない人もいないんですけど、高知の中で仁淀川という1つのきっかけがあって、自分達に、そしてつながる者達のために、今何ができるか。

(ジョン)

本物の人間が欲しい。本物の人間をもっと増やしましょう。それが大切なんです。

(司会)

本当の人間は意識がありますよね。さっき言ったような、ごみを捨てないし、それこそ子ども達に残してあげられますよね。

(黒笹)

個人的なことと言うと、ジョンさんから種とか土の話が出てきた、人間も自然の一部です。自然の一部だからこそ身の置き所というのは、この辺かなというのが、あったと思うけど、どこかで忘れてしまい、福島原発のような事態になった。人間の能力を超えたことをすると、手痛いことが起きる。

個人的には、なぜこの年になって高知に来たかと言うと、土に近いところで暮らしたいと思った。どうしてか、人間って土から生まれた、自然の一部だから。土から限りなく遠ざかって都会で、自然から1番遠い世界で何10年も暮らしたから。

人間は死であったり、自然は必ずそういうものを含んでいるので、本能的に怖い。コントロール不能なものがとても怖い。だからなるべくコントロールしようとして都市を作った。もう十分、都市で生活してきたので、いつか死ぬし、最後は土になるわけ。もっと土に近いところがないかと思って探した。

東京よりも圧倒的に高知は土に近い。椿山だと、もっと土に近い。高知市内に住んでいるので、多少の距離はありますが、それでも東京と比べると、圧倒的に土に近い。

高知ってもっと暖かいと思ってきたのに、寒い。東京にいと、冬は寒いけど造られた都市では冬は暖かい。南に来たのに、高知がこんなに寒いので目が覚めた。本来冬というのはこういうものか。高知の夏はものすごく暑い、殺人的に暑くて、冬はちゃんと寒いというのが分かりました。

要するに土に近い生活というのは、ある程度の年になると、本能的に心地よくなるもんだなという気がして、それに誘われるような形で、遺伝子レベルで誘われたかなと思って高知に来た。僕くらいの人を高知に誘うのは比較的簡単。どうしてか、遺伝子がもう呼んでるから、もっと土の近くにおいでって。そのスイッチを上手く入れてあげれば、若い人を呼ぶよりも簡単かなと思っております。

(司会)

黒笹さんのお話の中で、「あと10年20年なんだよね、がんばれるのは。20代30代でがんばってくれないと」私が30代です。シンポジウムに30代20代の参加を増やしてみたい。いくらすごくアイデアのある方達がいらしても、おじいちゃん、おばあちゃんとかなんです。40代の方が多かったので、40代50代の方が協力しながら、この上の世代にしっかり知恵を借りて、みんなでそれぞれの世代を超えてがんばりましょう。

(ジョン)

なぜ60代の人達がここに座っているのか、何でおじいちゃんばかり。なんで子どもはいないの。子どもは自分でセミナーできます、トークセッションも出来ます。今の子ども達ばかりじゃない、自分の人生もわかる、自分の未来も分かります。

東京でよくやりました、子ども達のセミナー、子ども達が案を作りました、宣伝しました、トークショーを全部自分でやりました。10代20代の年代は全然違う。面白い、私達よりもすごい元気。来年やった方がいいと思う。

高知県の子供達大好き。東京で普通の道を歩いて、子ども達に会い挨拶すると、普通の子供は逃げます。「変なおじさんだ」、恥ずかしいからと動かない。

高知の子供達は「おはようございます」を言う、全然知らないのに、素晴らしい。それがいい。子供達は絶対色々な宝を持っていると思います。絶対それを出した方がいい。

(司会)

これにてトークセッションの方は終了となります、本日のシンポジウムで「そうながや」を発見できた方、ぜひ上げて下さい。はい、全員上がりました、ありがとうございます。

ジョンムーアさんと黒笹慈幾さんから、たくさんのアイデア、たくさんのきっかけをいただきました。私達全ての世代が色々なアイデアを持っていますので、相乗し合って、助け合って、分かち合って、共に次の世代のために、そのあたりをしていきたいと思ひます。じゃあがんばりましょう。ありがとうございます。